

に於て相接し、そうして將に干戈の間に相見ようとしたのであつて、もし今數年の壽命を帖木兒にかしたならば、東洋史の上に極めて面白い大波瀾が畫かれたかも知れないのである。もし帖木兒の軍が支那の境上に現はれて、その得意の鋒先を振りまはしたならばといふやうな假定の下に、今種々の想像を回らさうとは思はないが、それにしても帖木兒最後の思ひ出としての此の軍容が、どんな有様であつたかといふことを記して置くのは必ずしも無用のことではあるまい。

先づ集まつた軍隊の數を見ると、當時彼の勢力範圍であつた各地方から二十萬の兵を徵集して、これならば「如何なる事業も成就することが出来る」と期したのであつた。さて此の二十萬の軍を支那に送るといふことは、その道筋のことを考がへて見ると實に困難な仕事である。道には勿論天山の險が横はり、不毛の沙漠が擴がつて居る。則ち諸將に諭して騎者各一人について十人宛の人を伴はしめたが、勿論之は武器兵糧の運搬などに用ふるものであつたであらう。そうして穀物數千荷は軍用の車によつて運ばれたが、之は道すがら種を蒔いて、軍の歸路に於て兵糧の用に供しやうとしたのである。尙ほまた七年間を支ゆべき乾草の飼料を用意し、その他乳牛二頭、乳羊十頭宛を各人に携さへさせて途中の食糧の缺乏に備へしめたと書いてある書物もある。其の數量の上に於ては一々あてにもなるまいが、とにかく此の種類の用意のあつたことは確實である。昔から支那や蒙古の軍隊が、西域を征伐したことは度々あるが、此の地方を通過するに當つて、かほどの用意のあつた例はない、従がつて糧食の缺乏から、或は沙漠の間に生命を失ひ、或は荒野の住人と化した様な始末は度々演出せられたことである。今帖木兒のかゝる軍旅の有様を見ては、如何に彼の用意の周到で、従つて此の征伐に重き望を置いて居つたかが知られるであらう。不